

抄 録

第61回 信州リウマチ膠原病懇談会

日 時：平成30年10月27日（土）

会 場：ホテルメトロポリタン長野 2階「千曲A」

当番幹事：吉田智彦（東信よしだ内科・リウマチ科／世田谷リウマチ
膠原病クリニック）

一般演題

1 最近経験した強直性脊椎骨増殖症と強直性脊椎炎の各1例

元の気クリニック

○野口 修

強直性脊椎炎の①29歳男性と強直性脊椎骨増殖症の②85歳男性例を報告した。①は初期で両側仙腸関節に硬化やビランは見られたが、脊椎周囲の骨化像はレ線では確認出来なかった。血清中の炎症性反応物質は常に陰性のため、治療薬はインドメタシンとサラゾスルファピリジンを選択したが、生物学的製剤を処方すべきか否か課題となった。②は並存した腰部脊柱管狭窄症の症状にリマプロストアルファデクスが著効したのが印象的であった。強直性脊椎骨増殖症は高齢者の疾患とされているが、本例は20歳台に頸肩部症状を自覚していたことから、骨化前の発症は若年期であった可能性も考えられた。

2 緊満性水疱を呈した好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の1例

JA 長野厚生連南長野医療センター

篠ノ井総合病院リウマチ膠原病センター

○宍戸 瑛理, 飯村 幸哉, 倉科 淳一
安村 匡弘, 田中 知樹, 小野 静一
浦野 房三, 鈴木 貞博

【症例】49歳男性【現病歴】既往に喘息があり近医内科で加療されていた。入院の2カ月前より鼻閉が出現したため当院耳鼻科を受診し、好酸球性副鼻腔炎、鼻茸と診断された。同日に右手関節、足関節に皮膚びらんが出現した。緊満性の水疱と浮腫性紅斑が出現し、左足に疼痛、腫脹、感覚異常を認め、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症（EGPA）を疑われ当院当科に入院した。【入院後経過】同日に皮膚生検を施行した。非典型的な皮膚所見ではあったが経過からEGPAと診断

し、PSL 65 mg（1 mg/kg）による加療を開始した。入院時は下肢の疼痛により歩行困難であったが、治療により皮疹、疼痛は速やかに改善した。皮膚病理では真皮の好酸球浸潤、壊死性血管炎、肉芽腫性病変を認め、血液検査では好酸球上昇、ANCA（-）、抗核抗体（-）、BP180抗体（-）であった。シクロホスファミド間欠的点滴静注療法500 mgを3回行った後にアザチオプリン50 mgを開始し、PSL 40 mgで退院となった。

3 関節リウマチの治療経過中に Castleman 病を発症した1例

信州大学医学部

脳神経内科, リウマチ・膠原病内科

○上野 賢一, 牛山 哲, 岸田 大
下島 恭弘, 関島 良樹

【症例】63歳男性。X-13年に関節リウマチ（RA）を発症。サラゾスルファピリジン内服のみで安定していた。X年1月、胆石症の入院中に血小板減少を指摘された。X年7月、咳嗽と下腿浮腫が出現。胸水と蛋白尿を認め当科入院。血小板減少の増悪、全身リンパ節腫脹と肝脾腫を認めた。リンパ節生検にて、リンパ濾胞の拡大と胚中心の萎縮および著明な新生血管の増生を認め、Castleman 病（CD）と診断した。プレドニゾン投与にて胸水や蛋白尿は軽快。しかし血小板減少が残存したため、トシリズマブを導入。その後、血小板減少は改善し、再燃なく経過した。【考察】CDは良性のリンパ増殖性疾患である。自己免疫疾患との合併も散見されるが、RAとの合併報告は少ない。RA患者の反応性リンパ節炎とCD患者のリンパ組織ではその病理像が酷似すると報告されている。RAの治療経過中に出現したリンパ節腫脹ではCDも鑑別し上げる必要性が示唆された。

4 悪性腫瘍を合併した関節リウマチ患者の リウマチ治療について

社会医療法人抱生会丸の内病院

リウマチ膠原病センター

○山崎 秀, 高梨 哲生

【目的】関節リウマチ (RA) 経過中に血液系腫瘍を除く悪性腫瘍を発症した症例の治療経過と RA 治療の関連を調査し、悪性腫瘍合併例の RA 治療について考察した。

【症例】過去5年間に悪性腫瘍を合併した RA 25例について、悪性腫瘍の組織と治療経過、悪性腫瘍発症前後の RA 治療と経過に及ぼした影響を検討した。

【結果】悪性腫瘍の組織は、乳癌8例、肺癌5例、大腸癌4例、卵巣癌3例、腎癌2例、胃癌、膵癌、肝癌、甲状腺癌が各1例であった。RA 治療は、悪性腫瘍発症前は11例に生物学的製剤が使用されていたが、悪性腫瘍治療中、全例生物学的製剤は中止されていた。MTX は化学療法治療中以外は継続されていた。悪性腫瘍治療後7例に生物学的製剤治療が行われていた。悪性腫瘍発症前後の RA 疾患活動性は評価可能16例において、発症前は平均 SDAI 10.1が悪性腫瘍治療開始後13.1と有意に増悪していた。悪性腫瘍治療後まで評価できた症例の経過において、調査時疾患活動性は発症前のレベルまで低下していた。

【結論】悪性腫瘍治療中、RA 疾患活動性の増悪を認めており、悪化例をどのタイミングで RA 治療強化するかが今後の課題である。

5 広範囲疼痛を主訴として受診した外国人 脊椎関節炎患者の実態

JA 長野厚生連南長野医療センター

篠ノ井総合病院リウマチ膠原病センター

○浦野 房三, 小野 静一, 飯村 幸哉
倉科 淳一, 安村 匡弘, 田中 知樹
鈴木 貞博

【目的】近年、外国人労働者は増加の一途である。厚労省は国内で働く外国人労働者数を127.8万人と発表した(2017年10月)。過重労働あるいは労災などにより、脊椎関節炎 (SpA) の症状が顕在化する可能性は高い。一方、広範囲疼痛を訴える症例では診断保留とされている症例も多い。

【方法と対象】調査対象は1999年から2017年までに当科を初診し、SpA と診断された外国人症例である。SpA の診断には欧州分類基準、強直性脊椎炎 (AS)

の診断には modified New York 診断基準を使用した。後ろ向き調査の項目は出身国、出身国での診断、線維筋痛症 (FM) の診断項目のうち1990年米国リウマチ学会分類基準 (ACR 1990) の圧痛点数、2010年米国リウマチ学会診断予備基準 (ACR 2010) の wide pain index (WPI) を調査した。

【結果】症例は25例 (男性5例、女性20例) で、AS15例、未分化型脊椎関節炎 (uSpA) 8例、乾癬性関節炎 (PsA) 1例、掌蹠膿疱症性骨関節炎1例であった。平均年齢は41.1歳。出身国は韓国7例、中国3例、米国3例、フィリピン2例、ブラジル2例、他8か国であった。母国の診断は SpA 2例、関節リウマチ2例、椎間板ヘルニア3例、関節症2例などである。本邦における前医の診断では頸椎症および頸椎ヘルニア2例、腰椎ヘルニアが2例、線維筋痛症3例、四肢関節炎6例、診断保留10例などであった。

ACR 1990に準拠した診断では12例が FM、10例が非 FM と診断され、2013年以降受診した症例では ACR 2010で、FM が5例、非 FM が3例であった。ACR 1990と ACR 2010の両基準を満たした症例は4例であった。WPI の平均値は6.6、圧痛点数は14.8であった。

【結論】2000年代、本邦では FM、あるいは、SpA 自体の認識が低かったため、整形外科旧来の診断名が下されるか、あるいは診断保留とされ、紹介された症例が多い。近年、FM の診断名は有名女性アーティストの公表などによって、国際的にも認知度が高い。Khan MA の啓蒙書に書かれているごとく、本邦でも広範囲疼痛症例は FM と診断されることが多い。人口調査では FM の有病率は1.7%と比較的高い疾患であるが、今後、SpA についても十分な医療的介入がなされる必要がある。

6 視力障害を呈した多発血管炎性肉芽腫症 (GPA) による肥厚性硬膜炎の1例

佐久総合病院

○高松 良太, 上條 祐衣, 佐藤 充人
小林 千夏, 松田 正之

【症例】77歳男性【主訴】右眼視力低下【現病歴】X年2月頃から右眼の視力低下が出現し、2カ月間で徐々に進行した。X年6月に右眼の白内障手術を施行。その後から右眼の光覚消失を認め、精査目的に紹介。その他に明らかな自覚症状、神経学的異常を認めなかった。血液検査では炎症反応の軽度上昇を認め、

MPO-ANCA が陽性であった。頭部造影 MRI で右優位のびまん性肥厚性硬膜炎と右視神経周囲、海綿静脈洞部の造影効果を伴う異常信号を認めた。Watt の分類アルゴリズムより GPA の診断基準を満たし、ANCA 関連肥厚性硬膜炎としてステロイド治療を開始したところ、右眼視力は速やかに回復した。【考察】視力障害を呈する ANCA 関連肥厚性硬膜炎の報告は複数認めるが、本症例のように視力障害以外の自覚症状、神経学的所見を認めない症例は珍しい。不可逆的な視力

障害を避けるために早期診断、治療が重要である。

特別講演

「関節リウマチおよび全身性エリテマトーデスにおける最新の治療」

聖マリアンナ医科大学

リウマチ・膠原病・アレルギー内科教授

川畑 仁人